

台湾派遣から考える、観光資源の活用と国際交流

千葉県立成田西陵高等学校 教諭 吉田 昌弘

1 はじめに

本校は成田国際空港に近く、在籍生徒の保護者も国籍が日本以外の国の方も多く存在する。本校では農業科と商業科が存在し、私は商業科に在籍している。今年度から改定される新学習指導要領において教科商業も科目構成が見直され、観光ビジネスという科目が新設される。インバウンドによる経済効果は大きく、日本という国全体で国際化が進んでいる。どの業種においても国外を視野に入れたマーケティング、販売戦略は必要不可欠となり、そのためには自国の観光資源を理解し、有効活用することが必須である。今後も諸外国との関りが強い本校だからこそ、観光に関する知識、マーケティングについて学ぶことが必要であると考え。そこで、教育と観光という視点から海外を視察し、現地での教育現場を学ぶとともに、台湾の観光資源を知り日本と比較することで日本独自の観光資源や特徴について改めて気付くことができるのではないかと。今後の国際交流に関する知見を深め、教育活動のなかで生徒が身近に感じることができる教材がないか。この2点を意識し本事業に参加した。

2 台北市内見学

(1) 人口密集地における商業施設

台北市は建物の構造や量販店、飲食店、コンビニエンスストア等、日本でも存在する店舗が進出しており都市部の共通点を強く感じた。人口密集地のため高層の建物が多く、一階に飲食店や量販店があるといった構造が多い。現在の日本では減少傾向にある24時間営業の店舗も多く存在した。台湾は世界的に見ても土地面積に対する人口密度が高いため、都市型の商業施設が開発され、今回訪れたXparkも都市型水族館として建設されたものとなる。本水族館は日本で神奈川県にある八景島シーパラダイス、宮城県にある仙台うみの杜水族館等を手がける株式会社横浜八景島が建築や館内の構成に関わっている。水族館のイメージとしては広い敷地に各種の生き物が配置され、訪れた人々が周りながら見て行くものが想像される。本水族館は敷地面積を縦に広くすることで展示場所を確保し、狭い敷地ながらも多くの生き物の姿を見ることができる。【図1】また、博物館的な要素として歴史を学ぶ、社会的な問題を考えるとといった学習という観点にエンターテインメント要素を取り入れることで来場者がまた訪れたいと思えるような仕掛けを行っている。特にスマートフォン用アプリを使用し、館内の案内やAR技術を駆使し、ある地点の壁にスマートフォンを向けることで、キャラクターが動き出すという仕組みも有り、観覧者が楽しめる仕掛けが多くなされていた。またSDGsの観点からプラスチックゴミが海の生態系に与える影響を文面だけではなく、視覚的にまた体験的に感じることができる展示もあった。昨今の環境問題への取り組みについては日本でも多くのメディアで取り上げられており、海の生物に対して与える影響について危機感を持って取り組むべき問題であると改めて感じた。

Xparkでは日本から派遣され、現地で働いている方からお話を伺う機会があり、言語が

違う中で働くことの大変さや、やりがい等を話して頂いた。生徒も実際に働いている方からの話を聞き、疑問点等気になる点が多くある様子で積極的に質問をしていた。



【図1】 館内の巨大水槽



【図2】 SDGsに関する取り組み



【図3】 AR技術を駆使した取り組み



【図4】 現地で働く方へお礼を述べる様子

(2) 国立故宮博物院と中正紀念堂

故宮博物院では宋、元、明、清時代の数多くの宝物が展示され、その収蔵数は2022年12月31日現在、総計698,856点/冊となっている。その中でも特に有名なのが、「翠玉白菜」である。この作品の特徴は翡翠本来の色を活用して、彫刻を行い表現されている点で、葉の部分にはキリギリスとイナゴが表現されており、工匠の技術の高さを象徴している。訪れたタイミングでは実物は展示されておらず、資料のみであった。しかしながら、「肉形石」【図5】の展示は行われており、その精巧さと加工技術の高さを見ることができた。中正紀念堂【図6】は中華民国の元総統である蒋介石を記念して建築されたもので、有名な衛兵の交代を見ることが出来たのは貴重な経験であった。



【図5】 肉形石



【図6】 中正紀念堂内部

3 教育交流会と授業見学

(1) 教育交流会

中壢商業高級中等学校に訪れ、交流会と授業見学を行った。交流会の内容としては、開会セレモニー、中壢商業高級中等学校の紹介と代表生徒挨拶、千葉県商業高校の紹介と生徒による千葉県の観光プラン【図7、図8】の提案であった。現地での交流会を行う前にはオンラインで交流会を行い、簡単な自己紹介等を行っていたが台湾の生徒たちはアニメやゲーム等で日本への関心が強く、歓迎の挨拶が流暢な日本語であったことに驚かされた。千葉県の生徒たちはとても歓迎されており、スマートフォン等を用いて積極的に交流を行っている様子であった。



【図7】 教育交流会の様子



【図8】 千葉県の観光プラン発表の様子

(2) 授業視察

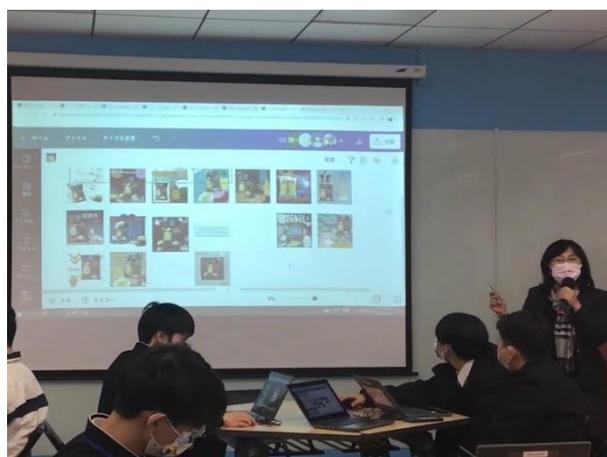
授業視察では、PCが常設されている教室での実演と端末のない教室での実演を見ることができた。まずPC教室の構成【図9】であるが、生徒は対面でPC等を操作し教員は前方で共有の画面及び電子黒板を用いて授業を行っていた。机のレイアウトについても机が6～8で構成されたものが複数用意されており、本校で行われているような全員が教員のほうを向く講義型のレイアウトとは異なることが印象的であった。生徒の顔とPC画面が見やすいため、進捗状況の把握が行いやすかったと感じた。さらに机間巡視も行いやすく参考になった。また、生徒一人一人がメールアドレスを保有しており、それを使用してPC及びサイト等へのログインを行っていた。実習ではAIが画像を生成するサイトを使用し、活用方法について触れた。AIについては今後もより発展し、身近になることは間違いがないため私自身も関心を持ち、勉強を行い生徒に伝えていく必要があると感じた。

午後は3～4名ごとに座れる演習室に場所を移動し、ポスター等のデザインツールを扱う「Canva」というサイトを使い実習を行った。まず印象的だったのが千葉でも取り込まれている一人一台端末の普及である。生徒は授業が始まると当たり前のようにPCへログインし準備を行っていた。内容としては生徒それぞれ、興味を引くようなポスターを作成しそれを全体に共有し、一番印象に残ったものに投票を行うという内容構成であった。日本でも同じような取り組みが行われているが、特筆すべきは全てをインターネット上でやり、生徒はそれに対して違和感なく取り組んでいるということである。日々の授業の中で当たり前のようにそのような機会があるからこそ自然と行えるのだと感じた。授業のどこか一

部分だけをICT化しようとするするとそれを行うための下準備に時間が取られ、肝心な内容にたどり着く前に時間が終わってしまう可能性がある。日々の授業内での取り組みからICT機器を取り入れることで作品の共有や情報の手に入りやすさ等のメリットがより大きくなるのではないかと感じた。電子黒板、プロジェクター、一人一台PC等、情報関連の設備は整っており、生徒も違和感なく授業中に使用している様子であった。



【図9】 PC教室の様子



【図10】 演習室での様子

4 おわりに

今回、交流事業に参加させていただき、商業科の職員として現地の商業施設や商業教育を見ることができたのは大変有意義なものであった。実際に店舗を訪れ、商品を見ることや価格の構成を知ることによって日本と比較し日常的に購入している物の値段が違うことや、日本でも台湾でも人気の商品が存在し、その共通点は何だろうかという興味を抱くことが非常に多かった。グローバル化が大きく取り上げられる中で、まずは今回のような現地を実際に訪れ、日々の生活を客観視するという経験が重要だと感じた。そのような経験がきっかけとなり、外国や外国人への興味関心へと繋がるのではないかと考える。新型コロナウイルス感染症によって減少した外国人旅行者も戻り初め、インバウンドによる経済効果も今後より期待できるようになる。本校としても観光分野に力を入れ、市や商工会議所等と連携をはかり、観光プランの提案はもちろん、地元産業の紹介や日本の商業高校の魅力等を発信できるよう取り組みを行っていききたい。また、現代では技術が発達し、スマートフォン等を利用することで言語の壁は越えることが可能である。台湾の生徒はコロナ禍で他国の高校生と関わるという機会がなかったせいか、日本の生徒に対してかなり興味を持って接しており、言語が異なる中SNSを通じて交流している姿が印象的であった。このような利便性もある反面、異なる文化をしっかりと理解していなければトラブルのもとにもなってしまうため、我々教員がインターネットモラル等を伝えていかなければならないとも感じた。

このように、多くの学びを得ることができた本交流事業が今後も継続され、自身も得たことをどのように活用するか考え日々の教育活動へ役立てていきたい。